

あけのほし 2014年6月

「大人になれない少年」

菊田行住

『わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

(マタイによる福音書6章11-13節)

社会福祉学科の3年生の時、日雇い労働者の街、「寿町」に通うようになったわたしは、野宿生活者に会うこととなりました。今はマスコミでもあまり使われなくなった用語ですが、いわゆるホームレスの人々のことです。

行き場を失い、職にあぶれて、生活保護も受けられない、基本的人権を著しく喪失した人々です。そのような方々を、少しでも支援したいと集まった市民ボランティアの活動に参加しました。夜間に駅の地下道等に寝床を用意している人の所に行って、体調の安否をたずねたり、冬場は毛布やスープなどの食事を提供しました。

その活動の中で、自分が住んでいる藤沢の街(神奈川県)にも、野宿生活をしている人々が少なからず存在していることに目が行くようになりました。そこで、横浜で中心的に支援活動している人々に相談して、藤沢でも同じように支援活動をしたいと申し出ました。ここで、身近な隣人を見て見ぬふりをしてしまつては、ダメな人間になってしまうと、熱い思いで支援活動をしたいのだと訴えかけました。誰もが見捨てられずに、大切にされる理想の社会を造って行くために、今、自分が関わらなくてはダメなんだと、大きな使命感を覚えたのです。たとえ自分一人でもやってみようからやらせて欲しいと、情熱を持って訴えかけました。すると、じゃあ自分も手伝うからと言って、一緒に藤沢での野宿者の支援活動を始めてくれる人も、出てきました。

こうして始まった、藤沢での活動は、その後、予想に反して大きな支援を受けることとなりました。藤沢にあったキリスト教の教会の方々が一緒に支援活動をしてくれるようになったのです。その中には、寿町の中のボランティア活動で知り合った年配の女性の方もいました。その方は、派手さや力強さはないのですが、その方の地道な関わり方を見るようになって、キリスト教に対する見方が、ずいぶん変わって行きました。労働運動をしている若い青年に比べれば、大変地味で表に立って目立つこともありません。それでも、淡々と自分の出来る範囲で支援活動に参加する教会の人が信じる信仰とはどのようなものなのか。今から思えば、このような人々こそ、自らの責任を担い、一度引き受けた役目を一貫してまっとうすることの出来る成人した人格の持ち主であったのです。

しかし、この頃の若いわたしには、力強く、元気にあふれた若い活動家の方がよっぽど魅力的でした。信仰というものは、自分の力を信じて、力の限りに精一杯生きることを良

しとする価値観からすると、大変物足りません。神とか何か信仰の対象に頼っていて、自分が努力するといった責任を、どこか放棄しているようで、弱々しく感じました。

冒頭の聖書箇所は、キリスト教徒が日々となえる「主の祈り」の一節です。その折りは、なんでもかんでも、神に頼ってばかりに見えます。日々の糧もそうですし、毎日のように「わたしを赦してください」と、祈られています。そんなに赦しを請う前に、二度と同じ過ちをしないように、努力をする気はないのだろうか、疑問でした。終いには、自ら誘惑を断ち切って悪から足を洗おうというのではなく、その点も神頼みなのかと思ったものです。

このような神頼みの生き方というものは、おおよそ活力のみなぎっている若い世代の人々にとっては、魅力に乏しいものであるでしょう。わたし自身も、自からの可能性にかけてみたい、何者にかになりたいのだと考えていましたので、神など不確かなものに頼るのでなく、いや、たとえ確かなものであっても、他に頼らずに、自分の足で立つて行かなくてはならないのだと、信じていたのです。ですから、キリスト教の方々は、好感も持てましたし、大変助けられもしましたが、自分か信仰を持つというような考えは、少しも抱きませんでした。

それから3年間、就職をするまで、わたしの学生生活は、この野宿者支援活動を中心に為されて行きます。生活保護法一つを片手に持って、市役所の生活相談窓口に乗り込んで行き、なんで困っているのに生活保護を受けられないんですかと、交渉しました。「～さんは、市役所に行っても、ちゃんと話を聞いてくれなくて、もう行きたくないと言っていましたよ。それでもあなたたちは、福祉のプロなんですか！」と、大変威勢の良いことを、言っていました。教会の方々も、「菊田さんは、本当に若いのに偉いわ。きっと、ご両親が立派な方に違いないわね！」と、大変褒めてくれて、自分でもまんざらでもなかったです。

しかしわたしの華々しい愛の実践活動は、ガラスが砕け散るように、短命に壊れて行きました。就職して仕事が始まると、それまであれほど熱心だったボランティア活動が億劫になり、次第に足が遠ざかって行ってしまいまし立。たとえ一人でもやってみせると言っていたのに、その責任を放棄して、他の人々に丸投げしてしまったのです。

二のようなわたしのような姿を、「永遠の少年」というのだと、河合年雄氏の『母性社会日本の病理』という本を読んで知りました。それは、日本人の人格形成によく見られる形で、一時期、自らを英雄として急激な上昇を試みるが、その行動は長続きせず、あるとき突然の落下が始まり、母なる大地に吸い込まれてしまうというものです。少年は、自立した人間になりたいと世界を歩み出すが、その外世界を歩み切る人格が出来ていないので、現実的な一貫性がなく、幻想を追いかける大人になれない永遠に少年のままで留まるのです。わたしの英雄的な活動も、学生時代という保護された状況だから出来たもので、社会人として持続して行くまでには、達していませんでした。大人になれないわたしの状態は、その後の職場でも続き、そこで再びキリスト教と出会って、大人への脱皮を計ることとなります。